

非西欧の数詞としての甲骨文字とその他の数詞

宮田 義美

神奈川県横浜市上末吉 2-11-16

yoshimi5@sf.netyou.jp

2023年10月15日

目次

第1章 漢字の起源	2
1.1 白川静著『漢字の世界』より	2
第2章 人間的表徴としての甲骨文字と書道	4
第3章 甲骨文字発見の歴史	5
3.1 落合淳思著『甲骨文字辞典』	5
3.1.1 2. 字源研究	5
3.2 『甲骨文の世界』古代殷王朝の構造より	7
第4章 貝塚秀樹編『古代殷帝國』より	9
4.1 竜骨の秘密	9
4.2 劉鸚の経歴について	11
4.3 古代殷帝國	14
第5章 心王菩薩門阿僧祇品	17
第6章 結論	21

第1章 漢字の起源

日本では明治以来「文明開化」の名のもとに西洋の数学を導入した。それ以来、日本特有の数学である「和算」は潰えた。いまでは漢数詞も消えようとしている。ここでは西洋の数学以外の数詞を取り扱うことにする。

日本では数学は中国から伝来したものである。古代中国の数詞を甲骨文字から見ることにする。最初に白川静著『漢字の世界』から甲骨文字の発見の経過を記述することにする。その前に白川静の漢字の見解を見ることにする。

1.1 白川静著『漢字の世界』より

古代の先進的な地域に、かつていくつかの古代文字が成立した。それらはみな、象形文字であった。しかしそのうち、いま残されているものは、漢字だけである。多くの古代文字は、その民族や文化の滅亡とともに滅び、あるいは他の民族のことばの表記に転用されて、表音文字となった。多くの古代文字は、その民族や文化の滅亡とともに滅び、あるいは他の民族のことばの表記に転用されて、表音文字となった。表音文字は進化した文字、象形文字は進化を忘れた文字であるというのが、一般の認識である。アランは漢字について、「それはことばでなく、事物をかいてある」(『芸術論集』桑原武夫訳、四百八ページ)という。文字がことばをかきえないとすれば、それはデッサンである。象形とは符号と対象の間の類似にすぎず、文字としての条件を欠くとされる。類似のためには、子供の最初のデッサンをみてもわかるやうに、一筆か二筆ですでに十分である。だから書かれた最初の符号は、早くも抽象的に、秘伝的になったと考へなければならない。そして人の知るとほり、最も未開な土人の間においては、円・十字・三角のやうな簡単な符号が、極めて広汎な意味をもち、常に魔法的であり、ただ秘密を知るものしか、意味を通じないのである」(同上、四三九ページ)

象形文字の論理からすれば、漢字ほどことばを具体的に、全的に表現しているものはない。それは一語を一字にかきしるし、一字のうちに形と音と意味とをそなえた、完全な文字である。それはことばとともにある文字であり、文字言語である。ことばは単なる音の連鎖ではない。音は概念の媒介者にすぎない。文字はそれに形を与え、内容を固定し、概念化するためのものである。単なる音符号の連鎖であってはならない。表音文字においても、アルファベットの連鎖がある視覚的なものを安定的に示し、それによってはじめて語として機能するのである。すなわちことばが音声言語としての自然的なものから、文字言語として文字を媒介するものとなり、そこに知的、文化的活動の場があたえらるるものとすれば、文字言語として形・音・義をそなえる漢字は、最も文化的な文字というべきである。アランの漢字デッサン説は、ことばの本質を文字言語としてとらえ、そのような文字言語の創出のためにこそ文字が作られたという本来の目的に、十分な理解を示すものではない。尤もそれは、たいていの進化論者たちが、一般におかしている誤謬である(p 3 - 4)

漢字は音を分析的に示すことがない。「ことばではなく」というのは、もとよりその意味である。しかし文字がことばをしるすとすれば、それは音表であろう。同音の語が限りなく多くて、表記としての意味が失われてしむからである。すべて、ことばが先行しているのであって、ことばが文字を選ぶのである。子音の表記を必要としないわれわれは、漢字から二種類の「かな」を抽出した。そしてなお、漢字を併用している。中国語に「かな」的な表記が可能であれば、それは早く中国においても生まれていただろう。文字の選択は、そのことばの本性に基づいてなされるものであり、適応の原則によるものである。文字言語として漢字の達しえた成就是、他のどのような文字体系とも匹敵するものであり、遜色のないものである。

漢字の構造に、高度の抽象性がみられることは事実であるが、それは厳密な約束に基づいており、また、文字構成上の要請による。古代文字としての漢字は、もとより象形の方法、絵画的・描写的であるよりも、抽象による線構成を志向した。そのことは、たとえばヒエログリフやアズステック文字と比較するとき、甚だ明らかであるように思う。

漢字は輪郭的な平面描写の方法を避けている。鳥獣の形においても、これを線によって表現する方法をえらぶ。たとえば馬(10上)や虎(五上)の卜文・金文に通じて、字形の線状化の過程化をみることができよう。虎(五上)では完全に文字の様式を整えている。輪郭は平面を予想する絵画であるが、線は立体と運動を含むデッサンである。その長短あるいは強弱の線の交錯が、律動を可能にする。デッサンにおいては、線は「人間的な表徴であり、おそらく判断の最も力強い表現である」(同上、四四三ページ)とされるが、漢字がまた書の芸術でもありうるのはそのためである。漢字がデッサンであるというのは、その意味では深く漢字の本質にあたるどころがある。漢字ほど、「人間的表演」として、その自己表現を求めつづけてきた文字体系は、他にその例をみない。そこには、神聖文字の伝統があった(p5-6)

漢字の原始性は、その多角的な構造法にあるのではなく、その文字形象に定着された観念の古代性のうちにある。しかしその原始性はまた、その造型のうちに含まれる古代的な心性を考察する上に、またとない貴重な資料を提供するものとなる(p9)

古代を考えるには、古代の資料を以てしなければならない。未開社会からの類推による方法は、あくまでも補助的なものである。古代は文化民族のもつ古代として、はじめて古代という歴史概念となりうる。漢字は、そのような古代から現代に至るまでを、生き続けた文字である。それは歴史の通路であるといえよう。そのような意味をもちうる文字は、漢字だけである。漢字の歴史は、この民族のもつ精神史の支柱をなしている。文学も思想も芸術も、すべてこの歴史の通路から見渡される。この書の目的も、そのような通路を遡って、古代に達しようとするにある。漢字のもつ歴史が、歴史としての一つの典型であるとすれば、古代文字としての漢字の世界もまた、古代の一の典型でありうるであろう(p10)

第2章 人間的表徴としての甲骨文字と書道

白川によれば「漢字ほど「人間的表徴」として、その自己表現を求めつづけてきた文字体系は、他にその例をみない。そこには、神聖文字の伝統があった」とされるが、「人間的表徴」としての「書道」が成立していると考えられる。

城南山人編『古代文字字典』甲骨文字・金文編¹の序文に以下のようにある。

1984年に『甲骨文字書道のすすめ』、1986年に『金文字形字典』（いずれも日貿出版社・絶版）を出してから十五年以上経った。甲骨文や金文で作品をを書きたいと願う人にとってこれらの本が絶版になってからは、日本の出版で誰にでも使えて、価格も適当な古代文字の字典が無くなってしまったので、私のところにまで多くの問い合わせが来るようになって久しい。この間、日貿出版社のご厚意で原版フィルムを譲り受けることができたので、これを復刻する華足もあったがのだが、両書の字典部分の文字例がすべて私の手書きであったのを原字コピーに改めたかったことや、できるものはすべて新しい資料に差し替えるために、本書は結局一から作り直したのである。

両書はそれぞれ甲骨文と金文の字典に作品例を付したものであったが、本書でも旧作を含め若干の作例・用例をのせた。作品例は芸術新聞社の拙著『古代文字書道入門』にも一部あるし、私のホームページでも簡単に見られるので、『古代文字書道入門』と本書『古代文字字典』があれば、その日から独りで古代文字書道のスタートが切れる訳である。(p3)

¹2002年12月20日 2007年2月20日第5刷 株式会社マール社

第3章 甲骨文字発見の歴史

「甲骨文字」の発見の歴史にはよく知られたエピソードが知られている。

そのエピソードは「甲骨文字」の紹介の書籍では必ずといってそのエピソードが紹介されている。その中で詳しいと考えられる書籍は「古代殷帝國」¹と考えられる。

最新の研究成果と考える内容は落合淳思が『甲骨文字辞典』²を2016年に発表した。それから『甲骨文字』の発見の歴史と研究者を見ることにする。

3.1 落合淳思^{あつし}著『甲骨文字辞典』

3.1.1 2. 字源研究

『説文解字』から甲骨文字の発見まで

中国における字源研究は、現存の資料では許慎^{えきせい}が著した『説文解字』が最古であるが、既にかなり体系化されており、前述した四種の成り立ちや亦声などの分類も行われている。『説文解字』は、古代の文献としては非常に優れた構成をしており、またその後、新しい古代文字資料がほとんど発見されなかったため、近代にいたるまで文字学における権威となっていた。

その後、古代の文字資料に基づいて科学的に字源研究が進められたのは清代になってからであり、考証学の一環として金文学が発達し、古代文字への理解がすすんだ。さらに十九世紀末に甲骨文字が発見されると、原初の漢字についての情報が飛躍的に増加することになった。

当初の甲骨文字研究者としては羅津玉・王国維が有名であり、彼らを中心に解読が進められた。甲骨文字は前述のように後代の漢字と直接の継承関係^{えきせい}があるため、他文明の古代文字に比べて解読は比較的容易であった。その後、董作賓^{とうさくひん}・郭沫若^{かくまつじやく}・胡厚宣^{ここうせん}なども研究に加わり、文字学のほか歴史学などにも応用された。

ただし、字源研究という視点から見ると、個別の文字については分析は進んだが、網羅的に行われることはなく、字源辞典も製作されなかった。網羅的な字源研究が行われたのは戦後になってからであり、日本の三人の研究者が有名である。p12-13

加藤常賢の研究

最も早く網羅的な字源研究を進めたのは加藤常賢^{じょうけん}であり、1949年から順次「漢字ノ起源」として学説を発表し、1970年に『漢字の起源』として出版した。

¹貝塚茂樹編 1967年5月15日第1刷発行 1972年6月15日第2刷発行 みすず書房

²落合淳思^{あつし}著『甲骨文字辞典』2016年3月25日第1刷発行 朋友書店

加藤の研究には、字源を字音と関連させて解釈する傾向が強い。漢字には形声文字や亦声のように字音を意識して作られたものも多いので、すべてが誤りではないが、純粋な（亦声を含まない）象形文字や会意文字も多いのであり、字音を重視しすぎたことは加藤の研究の短所でもあった。

しかも、加藤は本来存在しない字音をもって字源の分析を分析することも少なくなかった。例えば令（ ）について、「𠄎」の部分にキョウの音があり、それがリョウになったとし、発音を表す部分として解釈した。おそらく京（ ）などに「𠄎」が含まれることから「キョウの音がある」と解釈したのだろうが、実際には建築物の屋根の形であり、京などでは独立した声符ではない。実際には、「𠄎」の「今」と坐った人である「𠄎」からなる純粋な会意文字であり、建築物の中で人が命令を受ける様子を表している。

さらに言えば、加藤が研究に用いた発音は日本の漢音（中古音に基づきそれを簡略化したもの）であり、古代に作られた漢字の字源を研究する手法としては根本的な欠陥があった。

このように、加藤の字源研究には誤解や曲解がきわめて多く見られる。ごく一部には加藤が字源を発見した文字もあり、また網羅的な字源研究の先駆けであるから、研究史のうえでは重要な存在であるが、その研究手法は現在から見れば稚拙と言わざるを得ないのである。（p13）

藤堂明保の研究

加藤に続いて網羅的に字源研究をおこなったのが藤堂明保である。藤堂の研究も字音を重視したものであるが、加藤とは異なり上古音を復元したことが特徴であり、さらにそれを二百あまりにグループ化し、それに基づいて字源を分析した。藤堂の研究は大幅に理論化が進んだといえるが、しかし多くの問題も含まれていた。ひとつは前述のように上古音の復元には諸説あることであり、藤堂はカールグレインの上古音復元を基礎とし、それを改編したが、その発音体系は中国における音韻学とはかなり異なるものであった（その後、さらに新しい研究も出現している。巻末附録参照）。また、前述のように分類そのものに異説がある文字も少なくない。したがって、現状では字音に基づく字源研究は論拠が不確かにならざるを得ないのである。

また、これも前述したように上古音と殷代音との間には相違が見られることも問題である。上古音は春秋戦国時代以降の発音であるから、その時代に作られた文字はともかく、西周代の金文、さらには殷代の甲骨文字ですでに作られていた文字については、上古音からの研究は必然的に一定の矛盾が生じることになる。

そのほか、藤堂は漢字を「表語文字」と定義し、字義だけでなく字音の表示も含まれるとした。しかし、漢字には形声や亦声など字音を表示する文字もあるが、純粋な象形・指事・会意文字も存在するのであるから、すべての漢字を「表語文字」として扱うことには問題があった。そもそも、漢字は字形によって字義を伝える性格が強く、だからこそ言語体系が全く異なる日本や朝鮮半島でも普及しえたのであり、字音を重視しすぎたことは、漢字が持つ表意の能力を過小評価したものだと言えらる。藤堂は字源研究において、発音が近い文字は字源に「イメージ」の共有があることを前提にしたが、これも問題があった。「じっとひと所にとまる」や「ぐるりと取り巻く」など曖昧なイメージを定義し、恣意的な解釈をしたのである。個々の漢字には様々なイメージと結びつくのであり、例えば「舟」であれば、乗る・浮かぶ・速い・揺れる・運ぶ・渉る・水・河川などが連想される。結果的に藤堂の手法は、各々の漢字が持つ多数のイメージから、自身が復元した上古音のグループに合致したものを選択しただけのことであった。

なお、藤堂は文献資料に基づく思想史研究が専門であり、甲骨文字や金文の専門家ではなかった。そのため、字源研究には必然的に限界が生じたのであろう。(p13-14)

白川静の研究

最も遅れて研究を開始したのが白川静であり、加藤・藤堂とは異なり字形を重視したことが特徴である。特に会意文字の組み合わせからの分析方法を提唱し、一定の成果を挙げた。例えば魯()やれい()などは甲骨文字では祭祀名として用いられており、口の形()に「くち」だけでなく「祭器(この場合はさい())」の意味があることを発見した。

ただし、白川の研究にも多くの問題があり、最も重大なものが呪術儀礼を重視しすぎたことである。現存最古の漢字資料である甲骨文字の時代(殷代後期)には、王によって呪術的な祭祀儀礼が頻繁に挙行されていることから、白川は殷代の人々が初めて漢字を作ったものと見なし、多くの文字の字源に呪術儀礼が関連しているとして分析した。

しかし、甲骨文字は現存最古の漢字資料ではあるが、必ずしも原初の形ではない。四種の成り立ちがすべて出揃うなど文字体系として発達しており、前述のように文字の出現から甲骨文字に至るまでいはいは少なくとも数百年を経ていると推定される。また、西周代以降にも多くの漢字が作られているが、その時代には呪術儀礼の挙行が少なくなっている。したがって、字源を殷代の文化だけで解釈することはできないのである。

さらに言えば、殷代といえども呪術だけで王朝が維持されていたのではなく、軍事組織・統治制度・税収機構などさまざまなものが必要だったはずである。また、当時の祭祀儀礼では家畜や奴隷(戦争捕虜)が犠牲に用いられていたが、家畜の犠牲には王の経済力を誇示する目的があり奴隷の犠牲は王の軍事力を示すものであった。つまり、殷王朝は古代文明なりの合理性によって経営されていたのあり、そうした合理性を考慮できなかったことも白川の研究の短所である。

そのほか白川の分析には、より原初に近い甲骨文字の字形よりも金文を優先したものが見られる。白川の著作には金文の研究書として大部の『金文通釈』があるが、甲骨文字にはそうしたものはなく、甲骨文字の研究は相対的に少なかった。その結果、字源研究でも金文を重視することになったようである。

また、白川は加藤・藤堂とは逆に声符を軽視しており、当初は固有名詞以外に形声文字を認めないほどであった(後に動詞などの一部にも認めた)。実際には、象形・指事・会意・形声の四種が甲骨文字の段階で出揃っているのであり、字音を重視しすぎることと同様、軽視しすぎること科学的な視点とは言えない。

漢字は長い時代にわ(た?)り、多くの人々により作り続けられたのであり、多様な成り立ちをしている。そのため、単一の基準で起源を測ろうとする姿勢は、誤解や曲解を生むことになったのである(p14-15)

3.2 『甲骨文の世界』 古代殷王朝の構造より

甲骨文の発見

千八九九年、当時国子監祭酒、今の国立大学総長の地位にあった王懿榮は、瘡病おこりの持病があり、その特効薬としてすすめられた竜骨を買い求めさせた。竜骨といっても、小さな骨の破片である。

そのころ、南方の江蘇丹徒から出てきた劉鉄雲^{りゅうてつうん}が、王氏の広大な邸宅の食客として世話になっていたが、王・劉の二氏はいずれも金石の学に精通し、古代文字に造詣の深い人である。二人でめずらしげにその竜骨をながめているうちに、表面に刻み込まれた文字らしいものに気づいてしらべると、それはどうも今までの金石文字よりも、なお古色のある古代文字であるらしい。こうして両氏の竜骨搜集がはじまり、二年後には劉氏の手もとに千九百片を数えるに至った。王氏は前年の義和団の変に殉節して没し、その遺片千余点も劉氏の手に戻したので、やがてその収蔵は五千片にも達した。千九百三年、劉氏はそのうち千五十八片を選録して『鉄雲蔵龜』六冊を刊行した。いわゆる竜骨とは、古代の王朝が占卜に用いていた亀版や獣骨の碎片であったのである。ただその出土地については、河南省湯陰県の古ゆう里付近というのみで、詳しいことは知られなかった。土地の人や仲買の商人などが、その出土地を秘していかなかったからである。³ (P9-10)

³白川静著『甲骨文の世界』東洋文庫 204 1972年2月29日 初版第1刷発行 1981年6月5日 初版第2刷発行 平凡社

第4章 貝塚秀樹編『古代殷帝國』より

4.1 竜骨の秘密

物静かななにもかにも何となく不安の気が現れはじめた北京の都に、江蘇省丹徒県出身の劉鰐^{りゅうがく}という一風変わった学者が上京してきた。中国ではじめて口語文で、「老残遊記」という小説を書いたのであるから、日本でいえば二葉亭四迷にあたる近代文学の開拓者である。二葉亭もそうであったが、劉鰐もその字^{よびな}の鉄雲が暗示するように、一介の文士に甘んじない経國の志を抱いた、気骨を持った人物である。そのことはおいおい述べることにして、彼の落ち着き先は当時の国子監祭酒、王懿榮^{おういせい}の宏大な邸宅であった。国子監祭酒といえば学徳が一世に高い人の選ばれる、学者として非常な名誉職であった。その地位は恐らく現在の東京大学総長に数倍するであろう。学力はありながら不遇の学者を、私費を持って衣食させるのが徳望ある名士の第一の条件であった。当代の学者の興亡を荷っていたといわれる王氏の門には、多数の学者が集まっていた。劉氏はその一人となつたのであった。王氏は山東省の東北の福山県出身であるが、山東省の東北の福山県出身であるが、山東省は齊、魯など周代の古い国があった所で、その遺跡からは銅器石碑など古代の遺物が豊富に発掘される。これらに彫られた古代文字は金石文と称され、これを研究する金石学というのが新興の学であった。山東の学者には土地がらか金石を蒐集し、金石等に明るいものが多かった。王懿榮もその例にもれず、一般古典の学の中でも特に金石学に詳しかった。彼の大学総長の俸給は、食客たち金石のコレクションに費やされて、一銭も残らなかったといわれる。鉄雲も趣味は広く、歴史や地理の本を乱読したが、流行の金石学に対する関心も深かった。この点で王氏と食客の鉄雲とはすっかり意気投合してしまったのである。

五十四歳の王氏には瘧病^{おこり}、すなわちマラリアの持病があり、いつも季節の変わり目には発熱に悩まされた。現代のようにキニーネの特効薬の無かった当時のことであるから、いりいろ手をつくしたが根治しない。おこりには漢方の「竜の骨」がいちばんの妙薬で、これを煎じて飲めば治ると勧めた人があったので、ボーイを薬屋にやって買ってこさせた。

居合わせた鉄雲が何気なく袋を開いてみると、竜の骨というだけに、何の獣の骨かわからないけが、竜の骨というだけに、何の獣の骨かわからないが、なるほどいかにも古そうな骨の破片がでてきた。脂気がすっかりぬけて白じろとして、もろそうな感じのものもあれば、黄色味をおび、いかにも堅そうな感じのものもある。手に取ると、骨の表面にナイフでも刻んだ小さい文字らしいものが見える。なおよく眺めると、たしかに文字、しかも今までに見たこともない古い書体のお文字ではないか。大変な珍物がみつかったと心を躍らせた鉄雲は、すぐさま病中の王懿榮にこの旨を報じた。前にも述べた通り、中国の金石学と古代文字、とくに古銅器の銘文の金文について、深い造詣をもった二人は、文字学や金石学の書物を首っ引きで調べてみた。その結果は劉の第一感どおり、これはたしかに今まで知られているどの古代文字よりも、もっと古い文字にいちがいないということになった。

ボーイにたずねると、菜市口の達仁堂という薬屋で買って来たという。そこで鉄雲は早速その薬屋へ出かけて、「竜の骨」のことをたずねた。薬屋の番頭のいうところによると、何でも河南省の湯陰県か安陽県あたりで農民が畑を耕すと出てくるものらしいという話。さらにいろいろたずねてわかったことは、この骨の小さいのは粉末にし、「刀尖薬」と呼ばれて創傷薬として用いられ、毎年春の市の時に売り出される。やや大きいものは「竜骨」として薬材店で売られるが、わずかに薬として用いられるだけだから、一斤が六文ほどのやすいものであるということなのであった。これを聞いた鉄雲はさっそく北京中の薬屋をまわって、この「竜骨」と称するものを買集めた。

—中略—

この「竜骨」とよばれるものは、実は亀の甲と獣類の骨である。亀の甲といえば普通背の甲羅が考えられるが、この場合はおもに腹の甲羅のほうであり、獣骨は鹿の骨などもあるが、主として牛の、それも肩甲骨が多いのである。これらの骨はその後研究が進むにつれ、亀甲獣骨、または亀甲牛骨とよばれ、それらに刻まれた文字は亀甲獣骨文字、略して甲骨文字、または甲骨文などとよばれることになるのである。

以上が、中国の文字、つまり漢字の最も古い字体である甲骨文字の発見について伝えられている、最も有名なエピソードである。ところが、また一方、やはりこの頃の出来事として次のような話が伝えられている。山東省い県の骨董商人の范維卿はんいけいというものが河南省北部の農村へ古物をを探しに出かけた。ある村で、「何か畑から掘り出したものはないか、字のあるものなら何でもよい」というと、村人が骨を出して見せた。范が見ると、そこに刻んである文字は古代の文字によく似ている、これは珍しいというので、少しばかり買い取って、北京へ持って行き、まず日ごろの御得意の端方たんぼうに献上した。端方は、満州貴族の出身で、後に直隸総督や南北洋大臣に任じられとことのある、清朝の大官であるが、この頃ちょうど河南布政使から抜擢され湖北巡撫となっていた。

この范という骨董商がはじめて甲骨を端方に献上した話も、まえの鉄雲の話と同年のことと伝えられているが、この二つの話の間にどんな関係があったものかは明らかでない。しかし鉄雲が「竜骨」とよばれるものに古代文字を発見して北京中の薬屋を買集めたことは、おそらく「蛇の道はへび」で、たちまち骨董商の耳に入ったことであろう。骨董品を捜して河南省方面をまわっていた范にはすぐ第六感にくるものがある、これが甲骨文字を現地で手に入れる端緒いとぐちとなったものではあるまいか。このことは、また後にふれることにする。(p9-11)

二 忠義の人

さて俗に「竜骨」とよばれた亀甲獣骨に古代文字の発見された千八百九十九年の秋、骨董商の范はふたたび手に入れた十二枚の甲骨を、今度は王懿栄に売っている。この時は一枚につき銀二両だったという。当時の銀二両とは、ずいぶん高価なものだったが、今までの金石の収集家が誰も知らない初物であるから、王氏も惜しみなく大金を投じたものである。范はこれに味を占めて、この地から出土する珍貴な品を一手に独占するためには、その出土地を秘密にしておかなければならないと考えた。そこで彼は出土地をたずねられると、河南省の湯陰県で手にいれたものだと答えていたのが、実はそれより少し北の方だったのである。范は翌千九〇〇年（光緒二十六年）の春、たまたま甲骨八片を手に入れて北京へあらわれた。王懿栄はこれを購入したほか、やはりい県の骨董商の趙執齋から数百片を購入している。この頃には、ようやく北京の読書人の間に「竜骨」の評判が高くなり、その真偽がやかましく議論されるようになったが、王懿栄と劉鉄雲とは、その文字が

いかにも古い字体であるうえに、その中に殷王朝の王名らしいものが見えることから、これこそは殷代の遺物に間違いないと確信したのである。

ところが二、三年前から山東方面に起こっていた義和拳の排外運動が、この年にわかに北京へ波及してきて、この二人の甲骨文字発見の先駆者を、その渦の中に捲きこむことになったのである。義和団と称するようになった排外運動の主力が、山東省から河北省に移動し、運河に沿って次第に北上し、ついに北京をもその嵐に包み込んでしまったのは、1900年六月のことである。北京へ入った義和団は「すべての洋鬼（外人）を中国から追っ払え」と呼号しつつ、公使館区域（東交民巷）と北堂（旧教会の本山）を包囲した。范のような商人たちは品物をかかえて避難した。またはじめ義和団を利用して外国勢力を牽制しようとした清朝政府は、いよいよ日米仏独伊露澳八カ国の連合軍が北京へ迫ると、宮廷をあげて西安へ亡命してしまった。しかし王懿榮や劉鉄雲はそうでなかった。その時の王懿榮について「清史稿」（第二五五巻）には、次のように記されている――

[光緒]二十六年（1900年）、連合軍の入寇するや、[王懿榮は]侍郎李端遇と同じく命を拝して団練大臣に充てられる。懿榮は、拳民たのむべからず、当に商民を連れて守禦にそなうべしと、天子の御前に陳べたれども、事すでになすべからず。七月、連軍、東便門を攻む。[懿榮]はなお義勇兵を率いて、これを拒ぎしも、にわかに衆潰れて、また軍を成さず。すなわち帰り、家人に語っていわく、「われ義として、いやしくも生くべからず」と、家人環りにひざまずきて、泣いていさめしも、励しくこれを斥けて、薬を仰ぎぬ。いまだ死に即かず、「絶命の詞」を壁上に題していわく「主憂れば臣辱じ、主辱しまらるれば臣死す。止まるにおいてその止まることを知る。これ、是に近しとなす」と。筆を投げ捨てて井に赴きて死せり。これより先き、懿榮は命じて井を浚わしめき。ある人これに問いしに、笑っていわく「これぞわが止水なり」と。ここに至って果たして妻の謝氏と寡婦となり娘の張氏と同じく[国難に]殉ぜり。緒生の王杜松ら釀金してこれを埋めぬ。この事、上聞に達し、侍郎の官を贈られ、文敏と諡を賜れり――

腐敗官僚の多い清末の官界で、このとき国難に殉じたのはほとんど彼一人であったことを思えば、王懿榮はまことに立派な人物であった。しかも彼は「泛く書史に涉り、金石を嗜み、翁同龢・潘祖蔭（当時の碩学）、はともにその博学を称えき」と「清史稿」は記している。

この王懿榮が殉難の直前にはじめて発見し、蒐集につとめた竜骨は、ここにたちまち主を失ってしまったのであるが、烈士の遺愛品はどんな運命をたどったであろうか。その行方を追うまえに、共同の発見者劉鉄雲のことをかえりみなければならぬ。（p12-13）

4.2 劉鸚の経歴について

中国古典文学大系 51 「老残遊記・続集」劉鸚作 岡崎俊夫・飯塚明 訳 平凡社 1969年6月5日初版第1刷発行 1979年10月1日初版第7刷発行

そこでこの作者劉鸚についてであるが、「劉鉄雲伝」なるものが、清朝の考古学者羅津玉の『五十日夢痕録』の中にあり、胡適が『初集』（亜東本）の序の中でこれを引用し、その生涯のあらましを語っている。その生卒については『中国小説史略』でもあいまいで1850年から1901年頃とあるが、これは『二集』の劉鉄孫（厚源）の跋で、1985年9月1日六合（江蘇省儀微県の西）で生まれ、1909年7月8日（陽暦では8月23日）迪化で死亡と明確にされ、さらに劉大紳の『老残遊記資料』中の劉厚沢の注釈で家族関係その他がいっそう明らかにされたわけである。

劉鸚は字は鉄雲といい、江蘇の丹徒とあるから、現在の上海-南京間の、鉄道沿線の鎮江の人である。しかし劉家の原籍は安徽の蘆州であると、『二州』の跋で鉄孫が書いているが、これは簡譜による誤りで、実は陝西の保安県出身の軍人の家柄であると、大紳が訂正している。先祖の延慶公の第三子劉光世が宋の高宗にしたがって南渡し、鎮江府に住みつき、二十二代の劉成忠は咸豊二年（1852）の進士で、翰林院編修を授けられ、のち京畿道の監察御史、河南では黄河の治水に功績をのこし、曹国荃とともに捻匪の乱を平らげたりした人で、『因齋詩存』『河防芻議』などの著書もあって、劉鸚はつまり二十三代目、兄の孟熊、姉三人という官僚の家の次男坊であった。1860年から70年にかけての当時といえば、はじめて総理衙門（外国関係のことを管理する役所）が設置され、京師同文館が設立されて、欧米の学術輸入が開始され、いわゆる洋務運動が盛んになっていた時代で、孟熊などもフランス語を習ったりして、劉家には新旧の書籍も多かったが、父親が科学の勉強をさせようとしても劉鸚は、放曠にして縄墨を守らなかったというから、相当不良少年であったといってもよからう。彼の伝記を書いた羅振玉も少年の頃、鎮江からずっと北にのぼった淮安に住んでいた時、彼とはすでに友人だったが、彼の足音をきいても避けたというほどである。しかし元来聡明であった劉鸚は、その後大いに悔いることがあって、蟄居して家蔵の書籍を読みあさり、理学、仏道、金石文字、および医算占と一応の造詣を持ったおいうが、劉大杰がその『中国文学発展史』（1958）の中でいうように、彼の学問は「博くして雑」といわざるをえないであろう。まず淮安の南市橋に、遼東産の煙草を売る店をもたされたが失敗、揚州にいて親戚の卞氏をたより、医者を開業したがものにはならず、官吏の試験を受けようかと南京に出たがこれも中止して、六合県へ立ち寄ったあと、上海に出て石昌書局というものを開いたが、これもうまくいわずに淮安にもどっている。数奇な運命の前兆がすでに初めからあったようである。

しかし剛気な劉鸚は彼なりの信念を持って、それを徐々に行動にうつしていく。光緒十四年（1888）、黄河が鄭州で決壊した。自分を試してみよう、そう考えた劉鸚は河南へおもむき、時の河南巡撫であった吳大澂（恒軒と号し、同治の進士、軍官として活躍したが、詩文に長じ、書家でもあった）に建言して認められ、護岸工事にみずから率先して働き、治河に成功した。また水災が山東におよぶと、山東巡撫の帳曜（軍官、独学で勉強し、ことに山東巡撫時代に河堤を築き、道路を開くなど見るべきものがあった）に招かれて三年、大いに治河の功績をあげ、『治河七説』『黄河变遷図巧』『勾股天元草』『弧角三術』などを書いたのはこの時期である。彼の治河の説に賛成した羅振玉は久々に劉鸚との旧友をあたため、その後起こった日清戦争の折には、ちょうど祖母の服喪で淮安へ帰っていた劉鸚と会い、山海関を扼守しようとする清軍の戦略を批判して、

旅順、大連が危ういと予言したりしている。時局に敏感に動いていく劉鸚の片鱗がうかがわれようと思う。

帳曜^{ちやうよう}は在官のまま死んだが、これに代わった福潤^{ふくじゆん}に推薦されて北京へ出て総理衙門の試験を受け、劉鸚^{ちふ}は知府（府の行政を司る官）のお資格を得た。この地位を利用して彼はさっそく所信を実行に移そうとするのである。国の疲弊を救うには、まず鉄路を開かなければならない、そうすれば産業が振興され、国が富む、国が富めば政治もうまくいくはずだ、そう考えた。まず張之洞^{ちやうしどう}の招聘で湖北へいき、蘆漢^{ろかん}鐵道（のちの平漢鐵道）敷設の建言をしたが、盛宣懷^{せんせかい}の意見と相容れずに帰京した。ついで王文韶^{ぶんせう}の仲介で、津鎮^{しんちん}（のちの平浦鐵道）敷設を図ったが、反対されて結局は実現できなかった。それにもめげずにまた、外国商人と結んで、山西の鉱山を開くことを主張している。これまた万人を養い、国を富ます道だから、国家にその資金がなければ、外資を導入してもかまわない、彼らには一時の利益でも、われわれにとっては百代の利益になるといった。羅振玉もこの説については忠告したようだが、果たしてこれらによって劉鸚^{かんかん}は「漢奸」の汚名を着ることになった。

しかし彼の直情直行はあらたまらず、1900年、義和団事件の折り、北京の難民の困苦^{たいそう}欠乏を静観できず、八カ国連合軍のうちちょうどロシアの軍隊が太倉（政府の米倉）を警備していたが、その建物が邪魔になって貯蔵米もろとも焼き払うという噂をきくや、これと交渉して安価に払い下げてもらい、難民を飢えから救った。しかしこの事件が終わって数年ののち（1908）、政府の米を私売したという罪に問われて新疆省に流され、中風を患って、1909年7月8日に迪化で、五十三歳で数奇な生涯を閉じた。確かに禍に遭う仕儀になった直接の原因は太倉の米の私売にあったようにいわれているが、とにかく義和団事件の結末が1901年9月の辛丑^{しんちゆう}条約でついているとすれば、体内的な問題とは言え、新疆流^{しんきやうりゆう}謫の罪に問われるまで七年も経っている。これは飽くまで劉鸚の頑固な性格が禍^{しんきやうりゆう}いして、早くから袁世凱^{えんせいがい}と事をかまえ、山東では剛毅・毓賢^{いくけん}と不和、平漢鐵道の問題では盛宣懷と対立、平浦鐵道のときはたまたま浦口を買っておいだ土地の地価が騰貴したりして誤解を招いたり、それに『老残遊記』で清朝の官吏をなじった筆禍^{たんぼう}が加わって、ついに逮捕のことが端方^{たんぼう}（満州旗人、高官を歴任、当時は两江總督、金石学に詳しく蒐集家）に伝えられた。劉鸚とは旧知の端方は早速電報で逃亡をそそのかしたそうであるが、実は劉鸚の収集した骨董をめぐって、かつて端方との間に怨を結んでいたのだともいわれる。ともかく前年六月二日に南京から旅立って、病没まで、配所の生活は十三か月余りであった。

羅振玉の「劉鉄雲伝」の冒頭^{しんき}の部分に「予の殷墟の文字あるを知りしは、実に丹徒の劉君鉄雲に因る。鉄雲は振奇の人（卓抜なる人物）なるも、のち新疆に流されて死せり。鉄雲は予との交わり久しく、その平生の事実、これを没するに忍びざれば、その略をここに附記す」とある。羅振玉は鉄雲と幼な馴染み、前出の劉大紳も羅振玉の娘婿であったというから、両家は姻籍^{しんき}のお間柄、そしてまた羅振玉は甲骨文字研究者としても知られているけれど、その羅振玉に考古学の先鞭をつけたのも劉鸚なのである。河南省安陽県から、殷人の卜辞^{ぼくじ}を刻んだ甲骨が発掘されたのは光緒二十五年（1899）、多くの学者がこれを信じなかったなかで、いち早くこれを認めたのが劉鸚であった。彼の著書『鉄雲蔵龜』が甲骨文字研究の先驅となったのである。そのほかに、書画碑帖^{しょがひちゆう}

鐘鼎彝器，磚瓦古錢，印章封泥，古代樂器の類まで，たいへんな収集家であったようである（P533—P535）

1906年 春，日本遊歴．秋ふたたび日本を訪れて，日本女性榎目夷真を妾とす．p542

4.3 古代殷帝國

四 「鉄雲蔵龜」

さて劉鉄雲は愛国の情からいささか型破りの活動を行ったが，官僚として成功することはできなかった．彼の一生の念願とした救国は失敗したが，彼が趣味とした新発見の亀甲獣骨の蒐集の方は，意外な成果となって，この仕事によって，長く後世に名を残すこととなった．治河における行動と同じように，この趣味においても，彼は驚くべき熱心さを示した．彼の残した「抱残守欠齋日記」の辛丑（1901年）十月二十日（陰曆）の項に見ると，

巳の刻，い県の趙執齋来る．亀版と漢印各一匣を携う．印は計七百余万，亀版には大なるもの少しあり．晩に亀骨を点うれば共千三百件なり．富むべしというべし．

とあり，越えて十一月五日には，

大雪．亀版牛骨を査るに，統て共千八百九十片なり．

と記している．亀甲獣骨を得て喜ぶ彼の気持ちがよくうかがわれる．さらに翌1902年には，恩人である故王懿榮旧蔵の甲骨千余片を手に入れたので，彼の所蔵する甲骨は五千片以上になった．鉄雲はこの多数の甲骨をひとつひとつ自分で丁寧^{たくほん}に整理し，その拓本を作っていた．なかでも文字の多くある1058片の拓本を選んで石版印刷して出版した．これが甲骨文字をはじめて世界に紹介した「鉄雲蔵龜」六冊である．内藤寅次郎（湖南）が第二次清国旅行の際，「蔵書骨董をもって有名なる」劉鉄雲を崇文門外の木廠胡同を訪ねたのは，前年（明治三十五年）十一月十日のことであった．湖南先生が後に語ったところによると，その時，鉄雲はヘンなものを机の上にならべて，拓本を作っていた．彼が，それは何であるかと聞くと，これは近頃河南で掘った亀の甲であるという返事であった．湖南は，後には京都大学の教授となり，中国上古史を講義し，甲骨文字の研究もしたが，その時は大阪朝日新聞の記者として出張したくらいで，そういう閑問題を研究するかんがえはなかったので，ただ珍しいものであると思っただけであったという．これが日本人が甲骨文字というものを見たはじめてである．

それはともかくとして，「鉄雲蔵龜」には友人の呉昌綬と羅振玉の寄せた序文のほかに，鉄雲自身も序文を書いた．これまで述べたところと重複する点もあるが，当時の甲骨文字に関する知識を知るうえに興味ふかい一文である．

亀板は己亥の歳（1899年），河南湯陰県に属する古ゆう里城において出土せり．伝え聞くに，土地の人，地の墳起れるを見，これを掘って骨片を得たり．泥と相黏りつきて団^{かたまり}をなす．水中に浸すこと，あるいは数日，あるいは月余にして，始めてようやく離断る．しかる後，これを盆ちにおき，水をもってこれを盪いすすぎること兩三か月にして，文字をはじめて現るを得たりと．同時に^{もの}出でし所，並びに牛の脛骨ありて頗

る堅徴なり。亀板は、一種の色黄なるもはや堅く、白きものは略しく力を用うれば即ち砕け、拓し易からざらなり。

既に出土せる後、山左（山東省）の賈人の得るところとなる。みなこれ宝蔵し、善價を獲んと冀う。庚子の歳（1900年）に、范という姓の客あり、百余片を挾きて京師に走る。福山の王文敏公王懿榮はこれを見て狂喜し、厚値をもってこれを留む。のち「い県」の趙君執斎というものも数百片を得、また売りに文敏に帰せり。いくばくもなくして義和拳の乱起り、文敏ついに殉難したまいぬ。任寅の歳（1902年）その嗣の翰甫觀察、所蔵を售りて、公の「屈」債を清いしとき、亀板は最後に出でて計千余片あり、予悉くこれを得たり。定海（今浙江省鎮海県）の方君葉雨、また范姓所蔵の三百余片を得たりしが、これもまた予に帰せり。趙執斎また予がために齊・魯・魏の郊（山東山西河南方面）に奔走することおよそ一年、前後三千余片を収め得たり。予の蔵する所を総計すれば、約五千片にすぐ。己亥一坑の出すところ敢て「尽」くここにありとは言わずと雖も、その遺もわずかならん。

ここにはまず亀甲獣骨の出土と入手の事情が述べられているが、出土地を河南省湯陰県北のゆう里城としているのは、骨董商の言葉をそのまま信用したからである。はじめて甲骨を入手した当時の事情については、もっぱら范と趙という骨董商から買った事を述べているが、これは鉄雲自身の記すところであるから疑うわけにはいかない。とすると、さきの北京の薬店から買ったという話は、話としては面白いだけにかえて、伝説としてつくりあげたところがあるように思われる。ただこれを骨董商から見せられてその真價を見抜いた王懿榮と劉鉄雲の見識、ことにその蒐集に全力を尽くしたばかりでなく、はじめてこれを広く学会に紹介したことなど、鉄雲の功績は決して忘れてならないものがあつた。五千片を蒐めることができた鉄雲が、「己亥一坑の出すところ敢て「尽」くここにありとは言わずいえども、その遺もまたわずかならん。と豪語しているが、今日では発掘された甲骨は十万片をこえているといわれる。もし鉄雲が生きていてこれを知ったら何というであろうか。

毛錐（毛筆）の前は漆書にして、漆書の前は刀筆なり。小篆の「？」という字は漆書の「筆」の字なり。手に筆（）を持って漆を注ぐ形を象りしものなり。けだし漢人はなお古の漆書を見ることを得たるも、刀筆のごときは見ることはなかりき。ここをもって許叔重（説文解字の著者の許慎）は古籀文において必ず山川出すところの彝鼎（青銅器の容器）〔の銘文〕に資りしなり。意わざりき、二千余年の後、転じて殷人刀筆の文字を目睹し得んとは、大いなる幸せにあらずや。

〔説文の文字構成の原理である〕六書の旨（意）をもって鐘鼎（文字）を推求するも、また会ざるもの多し。思うに上古を去ること遠ければ、文字もますます推求しがたきためなり。

中国では、漢字をかくのに、毛筆と墨の前に漆が用いられ、その前に刀筆、つまりナイフの如きもので線刻することが行われたというのげ痛切になっているが、陰の時代すでに青銅器に鑄出された文字もあり、また甲骨や陶器などの上に筆墨を用いて書いたものが発見されている。しかし遺物からみれば、甲骨に刀筆で刻まれたものが一番重要なことはいうまでもない。また六書というのは、漢字の構造と意味の上からみた分類で、漢の許慎の『説文解字』の序文によると（一）象形

(物体を写實的にうつした絵文字) (二) 指事 (抽象的觀念を特徴的に現わしたもの) (三) 形声 (意味と発音を現わす二つの文字を組み合わせたもの) (四) 会意 (二つ以上の文字を組み合わせて新しい意味を現わすもの) (五) 轉注 (形声文字の変種) (六) 仮借 (同音で全く異なった他の同音の言葉を借用したもの) の六種をさすのである。このような文字の構造法を規準にして、中国の古代文字を研究するのであるが、それには『説文解字』を出発点として、周代の青銅器銘文である鍾鼎文にさかのぼり、さらにそれより古い殷代の甲骨文字にいたるのが順序である。しかし、これは、鉄雲の言う通り、なかなか容易なものではない。(p20-21)

第5章 心王菩薩門阿僧祇品

偈頌 = 佛をほめたたえる韻文

そのとき心王菩薩が佛に申しあぐるよう。

『世尊よ、阿僧祇・不可量・無分際・無周偏・不可數・不可稱量・不可思議・不可說・不可說不可說と云うことを承ってゐます。が、世尊よ、その阿僧祇とか、ないし不可說不可說とか云うのは、如何なることで御座いませう？』

ほとけ、心王菩薩に告げたまふ、『善いかな、善いかな、善男子よ、おん身は衆生を利益せんがために、よくこそ如来のさとり境界の甚深の義趣を問われたことである。善男子よ、おん身いま明らかに、聴かれよ、私はそれを説かうとおもふ』

心王菩薩が佛に申しあぐるやう『世尊よ、承知いたしました、よく拝聴いたしませう』ほとけ、心王菩薩に告げたまふ『百千の百千¹を一拘梨と名づけ、拘梨の拘梨を一不変と名づけ、不変の不変を一那由他と名づけ、那由他の那由他を一ひ婆邏と名づけ、ひ婆邏の婆邏を一作と名づけ、作の作を一來と名づけ、來の來を一勝と名づけ、勝の勝を一復次と名づけ、復次の復次を一阿婆らと名づけ、阿婆らの阿婆らを一得勝と名づけ、得勝の得勝を一分界と名づけ、分界の分界を一充滿と名づけ、充滿の充滿を一量と名づけ、量の量を一解と名づけ、解の解を一此解と名づけ、此解の此解を一離欲と名づけ、離欲の離欲を一捨と名づけ、捨の捨を一聚と名づけ、聚の聚を一通と名づけ、通の通を一頻申と名づけ、頻申の頻申を一網と名づけ、網の網を一衆流と名づけ、衆流の衆流を一出と名づけ、出の出を一分と名づけ、分の分を一分別と名づけ、分別の分別を一稱と名づけ、稱の稱を一持と名づけ、持の持を一不てん倒と名づけ、不てん倒不てん倒を一不幡と名づけ、不幡の不幡を一生と名づけ、正の正を一慧と名づけ、慧の慧を第一と名づけ、第一の第一を一覺と名づけ、覺の覺を一毘遮と名づけ、毘遮と毘遮を一極高と名づけ、極高の極高を一妙と名づけ、妙の妙を一羅婆と名づけ、羅婆の羅婆を一訶梨婆と名づけ、訶梨婆の訶梨婆を一解脱と名づけ、解脱の解脱を一黄と名づけ、黄の黄を一訶梨那と名づけ、訶梨那の訶梨那を一因と名づけ、因の因を一賢覺と名づけ、賢覺の賢覺を一明相と名づけ、明相の明相を一魔樓佛と名づけ、魔樓佛魔樓佛一忍と名づけ、忍の忍を一枝と名づけ、枝の枝を魔樓魔と名づけ、魔樓魔の魔樓魔を一等と名づけ、等の等を離疑と名づけ、離疑の離疑を一種と名づけ、種の種を一不放逸と名づけ、不放逸の不放逸を一魔多羅と名づけ、魔多羅の魔多羅を動と名づけ、動の動を一到と名づけ、到の到を一説と名づけ、説の説を一白と名づけ、白の白を一了別と名づけ、了別の了別を一究竟と名づけ、究竟ききょうの究竟ききょう一清涼と名づけ、清涼の清涼を一阿羅と名づけ、阿羅の阿羅を一潮と名づけ、潮潮を一由と名づけ、由の由を一祇らと名づけ、祇らの祇らを一味と名づけ、味の味を一泥らと名づけ、泥らの泥らを一戲と名づけ、戲の戲を一斯羅と名づけ、斯羅の斯羅を一聚沫と名づけ、聚沫の聚沫を一彌羅と名づけ、彌羅の彌羅を一堅固と名づけ、堅固の堅固を一風と名づけ、風の風を一満と名づけ、満の満を一不可稱量と名づけ、不可稱量の不可稱量のを一根と名づけ、根の根を一微細と名

¹百千の百千＝百千の自乗。百千は百の百倍にあらずして多数の形容詞として用ゐらる。百千三昧或いは百千萬劫の如し

づけ、微細の微細を一蓮華と名づけ、蓮華の蓮華を一魔伽婆と名づけ、魔伽婆の魔伽婆を一不可度と名づけ、不可度の不可度を一醜樓と名づけ、醜樓の醜樓を一語と名づけ、語の語を一劫と名づけ、劫の劫を一婆娑と名づけ、婆娑の婆娑を一不變と名づけ、不變の不變を一那由他と名づけ、那由他の那由他を一ひ婆羅と名づけ、ひ婆羅のひ婆羅を一作と名づけ、作の作を一來と名づけ、來の來を一勝と名づけ、勝の勝を一復次と名づけ、復次の復次を一阿婆らと名づけ、阿婆らの阿婆ら一得勝と名づけ、得勝の得勝を一分会と名づけ、分会の分会を一充滿と名づけ、充滿の充滿を一量と名づけ、量の量を一解と名づけ、解の解を一此解と名づけ、此解の此解を一離欲と名づけ、離欲の離欲を一捨と名づけ、捨の捨を一聚と名づけ、聚の聚を一通と名づけ、通の通を一頻申と名づけ、頻申の頻申を一網と名づけ、網の網を一衆流と名づけ、衆流の衆流を一 outcomes と名づけ、出の出一分と名づけ、分の分を一分別と名づけ、分別の分別を一稱と名づけ、稱の稱を一持と名づけ、持の持を一不顛倒と名づけ、不顛倒の不顛倒を一不癡と名づけ、不癡の不癡を一生活と名づけ、生の生を一慧と名づけ、慧の慧を第一と名づけ、第一の第一を一覺と名づけ、覺の覺一毘遮と名づけ、毘遮の毘遮を一極高と名づけ、極高の極高を一妙と名づけ、妙の妙を一羅婆と名づけ、羅婆の羅婆を一訶梨婆と名づけ、訶梨婆の訶梨婆を一解脱と名づけ、解脱の解脱を一黃と名づけ、黃の黃を一訶梨那と名づけ、訶梨那の訶梨那を一因と名づけ、因の因を一賢覺と名づけ、賢覺の賢覺と名づけ、賢覺の賢覺を一明相と名づけ、明相の明相を一魔樓陀と名づけ、魔樓陀の魔樓陀を魔樓魔を一等と名づけ、等の等を一離疑と名づけ、離疑の離疑を一種と名づけ、種の種を一不放逸と名づけ、不放逸の不放逸を一魔多羅と名づけ、魔多羅の魔多羅を一動と名づけ、動の動を一到と名づけ、到の到を一説と名づけ、説の説を一白と名づけ、白の白を一了別と名づけ、了別の了別を一究竟と名づけ、究竟の究竟を一清涼と名づけ、清涼の清涼を一阿羅と名づけ、阿羅の阿羅を一潮と名づけ、潮の潮を一由と名づけ、由の由を一祇らと名づけ、祇らの祇らを一味と名づけ、一泥らと名づけ、泥らの泥らを一戲と名づけ、戲の戲を一斯羅と名づけ、斯羅の斯羅を一聚沫と名づけ、聚沫の聚沫を一彌羅と名づけ、彌羅の彌羅を一堅固と名づけ、堅固の堅固を一風と名づけ、風の風を一満と名づけ、満の満を一不可稱量と名づけ、不可稱量の不可稱量を一根と名づけ、根の根を一微細と名づけ、微細の微細を一蓮華と名づけ、蓮華の蓮華を一魔伽婆と名づけ、魔伽婆の魔伽婆を一不可度と名づけ、不可度の不可度を一醜樓と名づけ、醜樓の醜樓を一語と名づけ、語の語を一劫と名づけ、劫の劫婆娑と名づけ、婆娑の婆娑を一問と名づけ、問の間を一無間と名づけ、無間の無間を一離垢と名づけ、離垢の離垢を一實勝と名づけ、實勝の實勝を一彌羅覆と名づけ、彌羅覆の彌羅覆を一法と名づけ、法の法を一波羅魔駄と名づけ、波羅魔駄の波羅魔駄を一決定と名づけ、決定の決定一流轉と名づけ、流轉の流轉を一廣説と名づけ、廣説の廣説を一無盡と名づけ、無盡の無盡を一等眞實と名づけ、等眞實の等眞實を一無我と名づけ、無我の無我を一阿槃陀と名づけ、阿槃陀の阿槃陀を一青蓮華と名づけ、青蓮華の青蓮華を一數と名づけ、數の數を一趣と名づけ、趣の趣を一受と名づけ、受の受を一阿僧祇と名づけ、阿僧祇の阿僧祇を一阿僧祇轉と名づけ、阿僧祇轉の阿僧祇轉を一無量と名づけ、無量の無量を一無量轉と名づけ、無量轉の無量轉を一無分齊と名づけ、無分齊の無分齊を一無分齊轉と名づけ、無分齊轉の無分齊轉を一無周偏と名づけ、無周偏の無周偏を無周偏の無周偏を一無周偏轉と名づけ、無周偏轉の無周偏轉を一無數と名づけ、無數の無數を無數轉と名づけ、無數轉の無數轉を一不可稱と名づけ、不可稱の不可稱を一不可稱轉と名づけ、不可稱轉の不可稱轉と名づけ、不可稱轉の不可稱轉と一不可思議と名づけ、不可思議の不可思議を不可思議轉と名づけ、不可思議轉の不可思議轉を一不可量と名づけ、不可量の不可量を一不可量轉と名づけ、不可量轉の不可量轉を一不可説と名づけ、不可説の不可説を一不可説轉と名づけ、不可説轉の不可説轉を

可説轉の不可説轉を不可説不可説と名づけ、このまた不可説不可説を一不可説不可説轉と名づける。」p49-53

2. 「塵功記」の大数の名

「塵功記」には、以下のような数詞が登場する。

一，十，百，千，万，億，兆，京，垓，？，穰，溝（葺），澗，正，載，極，恒河沙，阿僧祇，那由他，不可思議，無量大数

以上 21 の数詞が与えられている。吉田光由が呈大位著「直指算法統宗」(1592 年)を参考に「塵功記」を書いたとされる。「直指算法統宗」では、「無量大数」という数詞は見当たらない。「塵功記」の数詞の「極」以降の数詞は元の朱世傑撰「算学啓蒙」(1299 年)に至ってあらわれる。「極」以降の数詞は仏典から借りたものとされる。「恒河沙」はガンジス河の砂の意である。しかし、後に述べる「華嚴經 阿僧祇品」には、「阿僧祇」という数詞は登場しない。この「華嚴經」には巨大な数詞が現れる。

3. 「華嚴經」について

さて「華嚴經」は仏を説いたお経である。その成立年代は西暦 2 世紀頃までに以下の順序で成立したと考えられている。

般若波羅密多心經

八十頌よりなる般若波羅密經

維摩經

阿弥陀經

法華經

華嚴經

「華嚴經」は詳しくは「大方広華嚴經」という。サンスクリット語では「ブツダ・アヴァタンサカ・ナーマ・マハー・ヴァイプールヤ・スートラ」といい「ブツダの飾りと名づけられる広大な經典」という意味である。中国に漢訳された「華嚴經」は三つ存在している。

第一は、仏馱跋陀(ぶつだばつだ)羅(ら)(359-429)の訳した 50 巻(後の校訂を重ねて 60 巻)、晋の義熙(ぎき)14 年(418 年)3 月 10 日に始まり、元熙 2 年(420 年)6 月 10 日に完成した。校訂は永初 12 年(421 年)12 月 28 日、筆受は法業であった。

第二は、実叉難陀(じっしゃなんだ)(652-710)の訳した 80 巻本である。唐の則天武後の要請でコータンから梵本を携えて、長安に来た実叉難陀(じっしゃなんだ)が菩提流志、義浄と共に 695-699(聖歴 2 年)に漢訳した。筆受は法蔵であった。前者を 60 華嚴、旧訳華嚴經、晋經などと呼び、後者を 80 華嚴、新訳華嚴經、唐經などという。第三に般若の訳した 40 巻本(798 年訳)があり、40 華嚴、貞元經などという。これは前の新旧両訳における最後の入(にゅう)法界品(ほっかいぼん)に相当する訳である。

日本へは、新羅の留学僧などにより、旧訳の 60 巻本の「華嚴經」が伝えられ、新訳の 80 巻本は道慈(大安寺)により請来された際、736 年(天平 8 年)の遣唐使船で来日した唐僧道(どうせん)によりもたらされた。

さて「華嚴經」は仏を説いたお経である。その成立年代は西暦 2 世紀頃までに以下の順序で成立し

たと考えられている。

般若波羅密多心經

八十頌よりなる般若波羅密經

維摩經

阿弥陀經

法華經

「華嚴經」は詳しくは「大方広華嚴經」という。サンスクリット語では「ブッダ・アヴァタンサカ・ナーマ・マハー・ヴァイプルーヤ・スートラ」といい「ブッダの飾りと名づけられる広大な経典」という意味である。中国に漢訳された「華嚴經」は三つ存在している。第一は、仏馱跋陀(ぶつだばつだ)羅(ら)(359-429)の訳した50巻(後の校訂を重ねて60巻)、晋の義熙(ぎき)14年(418年)3月10日に始まり、元熙2年(420年)6月10日に完成した。校訂は永初12年(421年)12月28日、筆受は法業であった。第二は、実叉難陀(じっしゃなんだ)(652-710)の訳した80巻本である。唐の則天武後の要請でコータンから梵本を携えて、長安に来た実叉難陀(じっしゃなんだ)が菩提流志、義浄と共に695-699(聖歴2年)に漢訳した。筆受は法蔵であった。前者を60華嚴、旧訳華嚴經、晋經などと呼び、後者を80華嚴、新訳華嚴經、唐經などという。第三に般若の訳した40巻本(798年訳)があり、40華嚴、貞元經などという。これは前の新旧両訳における最後の入(にゅう)法界品(ほっかいぼん)に相当する訳である。

第6章 結論

白川によれば「漢字ほど「人間的表徴」として、その自己表現を求めつづけてきた文字体系は、他にその例をみない。そこには、神聖文字の伝統があった」とされるが、「人間的表徴」としての「書道」が成立していると考えられる。

しかし、日本の仏典には数詞を取り上げた仏典は少ないが、『書道』としてはいまだに盛んである。

『華嚴經』阿僧祇品の数詞を例示してみた。

別紙に甲骨文字とそれ以外の数詞を添付する。

そこには「人間的表徴」としての「書道」を見ることができよう。